

人間だけの特権とは

岐阜市立藍川北中学校 3年

杉山 みのり

もし私たちが百年前に生きていたら、ロボットという単語は見聞きもしない未知の存在だったでしょう。ロボットが登場したのは、1960年頃のアメリカ。それから今に至る約60年間でロボットという名が世界に知れ渡り、身近に感じられるようになった背景には、すさまじいスピードの技術進歩があったからです。

昨年冬、弟がロボカップに参加したことで、ロボットに対する私の考えも大きく変わりました。弟が参加したのは、サッカー部門で、ルールは人間がするものとほとんど同じです。試合中は人が指示することもなく、事前にプログラムされたロボットがコートの中を動き回っていました。私は、スムーズに方向を切り替えて、相手ロボットをかわしながらゴールへ進むロボットに目を奪われました。ロボットたちのサッカーを見てると、ロボットが常に隣にいる世の中はそう遠くはないかもしれないと思えてきました。

近頃社会全体では「非接触型社会」を目指そうという動きが高まっています。これまでとは違う生活様式が強いられている世の中で、ロボットの需要は高まっています。しかし、人との接触をすべてなくすることは不可能だと私は考えます。なぜなら、プログラムだけでは対応しきれない臨機応変さを求める仕事は、ロボットで代用することができないと思うからです。また導入費用を考えても必要数を整えると高額になり、まだ実現は難しいでしょう。

だからこそ今、人間そのものの魅力を見つめ、人間とロボットの共存について考えなければならないと思います。

現在、医療・介護・工業などで既に活躍しているロボットは、便利さに加えて安全性にも優れています。もし、人間を超える能力を身に付けたらと考えると恐ろしいです。この便利さや楽さを求め続け、ロボットに頼りきった生活をしていると、人間の健康までも脅かされるでしょう。

そんな中で人間がロボットに勝るものは何でしょうか。それは、ずばり「リアクション力」であると考えます。出演者がロボットのみのバラエティ番組を想像してください。どんなに面白いネタやツッコミをしても人間のような多様な表情がないため、面白さに欠け、とてもシュールな映像になってしまうでしょう。また私は実生活でもリアクションの大切さを味わったことがあります。今から約1年前、フィリピンから同級生が引っ越してきました。ある日一緒に下校していた時、ジェスチャーと簡単な日本語で、

「フィリピンは日本より暑いのだ。」

と聞きました。すると彼女は、

「暑いよ。」

と答えてくれました。私はコミュニケーションが取れたことのうれしさのあまりオーバーにリアクションすると、彼女も安心した表情で笑ってくれました。きっと母国語のコミュニケーションが学校でなかなかできない中で、人との関わりができる喜びを感じてくれたように思ったし、私も温かい気持ちになりました。こういった気持ちになれるのも、ロボット相手ではなく、人と人とのつながりだからこそだと思います。

このように、その場に合った自由で多様なリアクションは、ロボットにはできない人間の特権だと思います。だからこそ素直に笑いたいときには笑い、泣きたい時には泣く人間の自由を大切にしていきたいと思います。これこそがまさに「人間らしさ」なのではないでしょうか。

これからも先ロボットがどんどん普及していくと思いますが、そんな中でも私は「人間らしさ」を忘れず、素直に生きていきたいです。